

店頭から 「こんにちば」

第 81 回

すべてのおクスリをのまなくてはいけない？ 適したものをのむことが基本です

おクスリを処方されて服用するとき——。
あまりにも多いときは、ありませんか？



20種類もの内服薬？

実は、不快な症状を医師に訴えると、少しずつおクスリが増えていきます。気がついたら10種類以上になっていたというケースは、よくあることなのです。

78歳の女性。30歳代後半に卵巣を片側、切除してから、頭痛や、不定愁訴を発症しました。

転勤で、北は北海道、南は九州まで引越しを重ねたそうです。九州にいたころ、冷えのぼせがひどく、漢方薬に出合ってから、服用しているとか。

その後、血圧が高くなり、高脂血症も出てきたので、総合病院へ。

8種類の内服薬が出ているものの、漢方には否定的なので、別の開業医にかかり、漢方薬を4種類出してもらっているそうです。

結果、体調に合わせて選択、服用しているとのこと。

膝が痛み、しびれるので、整形外科にもかかり、骨粗しょう症のおクスリとカルシウム剤、鎮痛剤と湿布薬が処方されているとも。

不安になるため、心療内科にも

かかり、漢方薬と安定剤が処方されて、合わせると20種類ぐらいの内服薬となっているのです。

しかも、過去に処方されたことのある漢方薬が残っているので、症状に合わせて、服用を。

慣習の責任者は…

ご本人は、漢方薬の本を購入、「勉強している」と話しています。その本には、漢方薬を複数、同時に服用するようなことが書かれてありましたが、本当でしょうか。

おクスリの種類があまりにも多いので、「どうしようかと悩んでいました」と。

そこで、漢方薬を複数、同時に服用すると、処方が変わり効かなくなる可能性があるので、「1度すべての服薬をやめて、1つずつ試してみても」と提案しました。

とはいえ、「減らすのはいいが、やめてしまうのは不安で怖い」とのこと。

「では、せっかく『お薬手帳』があるのだから、病院へ行ったとき、主治医に見せて、おクスリを減らしたいと伝え、やめていけばいい

のでは」とも提案しました。

しかし、拒絶を。理由は、分かってくれる医者がないから、「ここへ相談に来た」というのです。

とはいえ、私の提案もすべて、拒否してしまうので、もうお手上げ状態に。「適切な助言ができなくて」と、申しわけなく思いました。すると、「相談できただけでも幸せです」と、帰って行かれたのです。

このようにおクスリに頼りきっている人は、結構多いのではないのでしょうか？

国が多剤服用を抑制して医療費を削減しようとしています。このような慣習を作り上げた国にも、責任がありそうですね。

宮川薬局(宮城県仙台市)代表
薬学博士・薬剤師

みやがわとしじ
宮川季士先生

プロフィール

1976(昭和51)年、東北薬科大学(現・東北医科薬科大学)卒業。'78(同53)年、同大学大学院修士課程修了。'87(同62)年、薬学博士学位。地域に根ざしたおクスリ屋さんとして、多くのファンが。

「今夏の疲れが出ていませんか？ ぜひ店頭でご相談を」

